

「小断面の木材から大空間を創る、木造建築の新しい可能性」

「中国木材名古屋事業所」 2003年竣工

富永 祥子
Hiroko Tominaga

1986年 修猷館高等学校卒業
 1990年 東京藝術大学美術学部建築科 卒業
 1992年 東京藝術大学大学院美術研究科 修了
 1992～2002年 香山壽夫建築研究所 勤務
 2003年～現在 福島加津也+富永祥子建築設計事務所
 2011年～現在 工学院大学建築学部建築デザイン学科准教授

現在は、中国木材名古屋事業所に続く「木の無柱空間」の第2弾として、一昨年度から就任した工学院大学の弓道場を設計中。木造の伝統性と現代性について考える日々を送っている。

賞歴
 JIA新人賞
 中部建築賞 入賞
 日本建築学会 作品選奨
 住宅建築賞 金賞



題字・箱島信一書
 発行 修猷館同窓会
 東京支部事務局
 〒185-0034
 東京都国分寺市光町 2-14-85
 (有)パルティール内
 FAX 042-573-5060
 東京修猷会ホームページアドレス
<http://www.shuyui.gr.jp>

良い巳年となることを願って



東京修猷会副会長
 大須賀 頼彦
 (昭和37年卒)

明けましておめでとうございます。
 新しい年を迎えるたびに、今年こそはと、今年が良い年でありたいと願うのが人の常ではありますが、館友の皆さんはどういう思いで新年をお迎えでしょうか。平成25年がどういう年になるのか見通す前に、過ぎた昨年を振り返ってみましょう。

何と言っても先ず感じますことは、一昨年3月の東日本大震災と、それに続く原発の事故。あの時、リアルタイムでテレビに映し出された津波に洗われる街や村、そして爆発で白い煙を上げるむき出しになった原発建屋の映像は、今でも鮮明に目に焼き付いています。そして、その復旧、復興が遅々として進みません。

「がれき」は処理に必要な用地の確保が難しく、その多くが放置されたままです。壊れた「原発」はまだ手探りの状態で、収束・安定には程遠い状態です。早期復旧、早期復興が叫ばれながら、何かもどかしさを感じざるをえません。時代も規模も違うので同列には論じられないでしょうが、90年前に起きた関東大震災の時に、後藤新平が仕切った復興事業と比べあまりにも遅い対応に、私は今の国の有りように不安を感じざるをえません。

政治面では、社会保障と税の一体改革についての3党合意を受け、消費税増税に道筋ができたものの、景気弾力条項もあり実施までには紆余曲折が予想され、正直先が見えません。
 そして、夏以降大きく影を落としてきたのが、尖閣と竹島の領土問題です。特に尖閣諸島の領有権の対立は経済面にも影響が拡大してきており、落としどころが全く見えません。

良い思い出はあまりありませんが、夏のロンドンオリンピックでの日本女子選手の活躍には感動しました。精神的スタミナとでも言いますか、彼女たちの頑張り、これからの日本社会での「女子力」の台頭を予感したのは私だけでしょうか。

さて、迎えた巳年、平成25年はどういう年になるのでしょうか？十二支の「巳」は、植物に種子が出来はじめる時期をいい、「漢書・律曆志」では、草木の生長が極限に達して、次の生命が作られはじめる時期としています。なにやら大きな変化がありそうな予感もします。過去をみてみても、巳年は実際に荒れています。昭和4年・世界恐慌、16年・日米開戦、28年・スターリン暴落、40年・米国の北爆開始、52年・第1次オイルショック、平成元年・昭和天皇崩御、そして13年・米国同時多発テロです。

今年、震災の津波で洗われた地域の復興の方向性や、原発を含めた原子力への対応、また少子高齢化社会での国の財政と負担の構図などについて骨太の議論を進め、これからの日本の在るべき姿、理念をはっきりとさせたものです。そのためにはなんと言っても政治体制の安定が先ず求められますが、そういう中、昨年末に衆議院議員選挙が行われ新しい政権が誕生しました。国民としては、今度こそ思いで期待したいものです。

ところで今年の9月に、2020年夏季オリンピックの開催地が決まります。東京がイスタンブール、マドリドと競っていますが、オリンピックと東京といえば、半世紀前、昭和39年の東京大会のことが思い出されます。

明治39年卒業で安川電機を創業された安川第五郎先輩は、その東京オリンピックの組織委員会会長として、アジア初のオリンピックの運営に大変尽力されました。大会期間中、国立競技場に翻っていた五輪旗は、その見事な大会運営に感動したIOCのプランデージ会長より安川会長に寄贈されましたが、その後この五輪旗は安川先輩から母校修猷館に贈られ、現在も体育館に飾られています。

もし東京開催が決まれば、経済効果はもちろん最近縮み思考にある日本に、明るい夢と希望をもたらすものと期待しています。
 最後に、今年が良い年となりますよう願いますとともに、東京修猷会のさらなる発展と、館友の皆さまのご健勝、ご活躍をお祈りして新春のご挨拶といたします。



東京修猷会〇三年活動スケジュール
 二木会は6、8月を除く毎月第二木曜日開催

1月	二木会 於：学士会館 会報発行 正月に全会員に送付
2月	二木会 於：学士会館
3月	二木会 於：学士会館 春季常任幹事会
4月	二木会 於：学士会館 二木会新人歓迎会
5月	二木会 於：学士会館 二木会ゴルフコンペ
6月	二木会 於：学士会館
7月	二木会 於：学士会館 二木会ゴルフコンペ
8月	二木会 於：学士会館 二木会ゴルフコンペ
9月	二木会 於：学士会館 二木会ゴルフコンペ
10月	二木会 於：学士会館 二木会ゴルフコンペ
11月	二木会 於：学士会館 二木会ゴルフコンペ
12月	二木会 於：学士会館 二木会ゴルフコンペ
12月	二木会忘年会 於：未定

二木会では、毎回各界でご活躍の卒業生から貴重なお話を聞きします。皆様、奮ってご参加下さい。

2012年度東京修猷会総会

「GO AHEAD! 修猷!」

実行委員長 刀禰 晋輔(昭和61年卒・六一会)

2012年度東京修猷会総会は、昨年6月15日金曜日にホテルオークラ東京別館アスコットホールにて開催され、624名もの参加により、無事成功裡に終了した。ご参加いただいた皆さま、ご協力いただいた方々に、本稿を借りて改めて御礼申し上げます。

進化し続ける「修猷の今」を共有し無限の可能性を再確認したい!

私たちが六一会は、在校時、創立二百周年の節目に最高学年として過ごした。各種記念式典等を通じて、修猷の伝統と重さ、何よりも創建以来の建学の精神とその歴史、伝統を正しく評価し、伝統継承の意思を強く持つ必要があることを体感した。その一連の行事で使用されていたフレー



懇親会スタートのご発声は宮川一二先輩(昭和12年卒)

ズが、「GO AHEAD! 修猷!」である。このフレーズを総会に用いることにより、在学時に感じた修猷への思いを進化させたいと考えた。久しぶりに会う仲間と過去を語るのみならず、進化し続ける「修猷の今」を見ることにより、あらためて修猷魂を胸に刻み、世代を超えた繋がりを未来に向けた夢を胸に晴れやかな気分で会場をあとにする、そのような総会を目指し準備を開始した。

「久遠の理想を望みつゝ」会場では新たな試みも

総会当日は天候にも恵まれ、定刻通り開始。第一部の総会では、物故者追悼に始まり、東京修猷会中川勝弘会長、5月に福岡同窓会会長から相談役となられた出光秀相相談役、4月に就任された奥山訓近館長にご挨拶をいただき、土肥研一幹事長より事業報告等が行われた。

合わせて総会準備における幹事学年負担軽減を考慮した。総会幹事は、卒業後25年と与えられるすばらしい機会であることは言うまでもないが、今後、準備・運営に携われる人が減少していく可能性が高い。コンパクトな人数での運営を実現したいと考え、福岡をはじめ各地の同

「今の修猷館を再訪」するビデオ&トークショーを実施。修猷館を知り尽くした修猷博士と助手による軽快な解説で、会場を沸かせた。恒例となった学生応援企画では、約百名の先輩方の協力を仰ぎ、年代を超えた活発な交流が繰り広げられた。新会員紹介では、修猷を卒業したばかりの23名が壇上へ。頼もしい仲間を迎えることができた。



挨拶する刀禰実行委員長

事例を掲載した小冊子「修猷ルール」の発刊など、新たな試みにも気を配った。参加していただいた方に少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

「修猷で得た友」と思えば一生の宝物である。

さて、自己満足の部分も多々あるが、当初目指した総会運営は、ほぼ達成できたのでは思っている。1年半近くにわたる準備期間は、楽しく充実した日々であった。このような機会を与えてくれた東京修猷会、参加していただいた皆さまの温かいご指導、ご声援、ご協力に対し、私の後輩達、東京修猷会の発展に少しでも貢献することで恩返しをしていきたいと思う。

今年の総会は、昭和62年卒を幹事として、同一会場にて開催される。すばらしい会の開催を楽しみにしている。

飛び交う博多弁と懐かしい顔。修猷グッズの限定販売やスライドショーの上映で、母校への郷愁の念は更に強くなった。普段なかなか会えない同世代の館友(この日のために福岡から駆けつけた同級生もいた)と会えた事はもちろん、大先輩の方々が脳裏をよぎった。

東京修猷会体験

「修猷は本当に生きていた」

草柳 輝(平成23年卒)



高校時代と変わらず和気藹々と交流できた事もかなり良い刺激になった。

「修猷は生きていた」

高校時代に耳にしたこの言葉

総会コンセプトの体現を目指した学年企画

学年事務局・企画担当 鳥羽 隆一(昭和61年卒・六一会)

第三部(懇親会)の閉会の挨拶にあたって壇上に立った実行委員長と副実行委員長の目には、会場を埋め尽くす来場者の皆さんの満面の笑みが映ったと言います。それを体現できるように企画企画、会場演出、記念品を、《記憶に残る》《記録に残る》《記憶に残る》ものに作り上げていくというものであった。



懐かしい学ラン&セラー服の「記念写真コーナー」

福岡から駆け付けてくれた同窓会者、修猷博士と助手が案内役となり、来場者全員で今の修猷館を訪ねる「修猷館のいま大研究」ビデオ&トークショー、それと連動して現在の校舎を背景に、今だからこそ皆で撮れる顔はめ看板「記念写真コーナー」、コンシェルジュの案内で社会人の先輩と学生の後輩をつなぐ「学生応援企画」、東京修猷会初の試みで、58年卒の先輩方、修猷館同窓会とのコラボによる「修



「修猷ルール」のオリジナルグッズの展示。お土産もたくさんあります。

「修猷ルール」は面白い!

東北修猷会・事務局 出納 克彦(昭和45年卒)

昭和61年卒の皆さんが、「修猷ルール」を発表されて以来、45年卒の私も大いに楽しんでいます。今も東北修猷会のブログで、いわば45年版「修猷ルール」を紹介させていただいている。

東北修猷会発足以来、先輩・後輩の皆さんと豊かな交流をさ

ある大学の同窓会のHPには、「同窓生は縦系である、と思

典型的な利益共同体でもない。あえていえば文化共同体か? その維持は困難かもしれない。けれどもあるとき突然に何もかも奪われたときに、同窓会という一種の文化共同体(精神的絆)がたつた一人の人の生きる為の縁(よすが)となることもあるのかもしれない」とある。この言葉は、そのまま東北修猷会にあてはまると思う。その意味で、「縦系をつなぐ縁(よすが)」として、「修猷ルール」はとても素晴らしい発想だと思っている。今後、我々の時代の「修猷ルール」を探り続けたい。

45年卒「修猷ルール」I 修猷生徒のデータ定番は、大濠公園でのボート・二人乗りだ。

2013年
日本は
どうなる?!

今こそ修猷魂を生かす時代

日経QUICKニュース社 代表取締役社長
高見 信三氏(昭和51年卒) 寄稿

英エコノミスト誌による未来予測「2050年の世界」をご存知だろうか。それによると低成長から抜け出せない日本は2050年に、豊かさの指標である一人当たり国内総生産でイタリア、ロシアに抜かれ、韓国に半分以後退するという。許容しがたい姿である。

誰も40年先を正しく予想できないが、あなたが絵空事とも決めつけられない。失われた20年を経てなおデフレから抜け出せない日本。「2013年はその後のわが国の行方を左右する岐路だった」と後に語られるかも知れない。いま道を誤れば二等国に転落するリスクすらある。世界に誇れる日本であり続けるため、よく考え、決断し、実行しなければならぬ。

「新たな立国」へ岐路 成長こそが社会を癒す

バルな大競争が繰り返されてくるのに、国内では局所的な議論がはびこる。長引く円高とデフレが改革への意欲を奪っている。このままでは勝算はない。最大の危機は「決められない国日本」を企業が限り始めたことだ。国民がしっかりと認識しなければならぬ。思い切った量的緩和や日銀の外債購入で行き過ぎた円高を是正する一方、長期的には円高に対応できる産業構造への転換に取り組みむべきだ。チャンスを与え、優れた才能を活用して生産性を高めるとともに、基礎研究を強化してイノベーションを促す努力がカギを握る。バイオ研究は京大、素材は東北大というように拠点集中型で育てる「よ

日本はなぜ低迷から抜け出せないのか。一言でいえば、円高とデフレで国全体が「野性」を失っているからだ。リスクを避け、従来のやり方を踏襲することをよしとする守りの傾向が強まっている。既得権益に踏み込む改革は抵抗を受け、年金・社会保障改革、法人税引き下げ、TPP交渉など痛みを伴う改革が前に進まない。原発など個々の課題では物事の一面だけが強調され、競争力を高めるための骨太な決断ができない。

具体的には一段の量的緩和と財政出動だ。日米欧とも企業・家計(民間部門)がおカネの返済に走っており、政府だけが借金



が奮い合っている現実にも無頓着な人も多し。円高、デフレ、原発問題、硬直的な労働法制、高い法人税、政治の混迷。日本にとどまるべきか、経営者は思案せざるを得ない。今年まず手をつける必要があるのは円高修正とデフレ脱却だ。放置すれば産業空洞化が決定的になる。

「無闇に成長を求めず、成熟社会を楽しみ生き方を」という考え方もある。気持ちにはわかるが、実際には実現不可能だ。なぜなら海外勢に負ければ分配は維持できないからだ。グローバル化した世界では、常に他国との関係で物事が決まる。波を乗り越えるには競争と、その結果としての成長が不可欠だ。

「三丁目の夕日」に描かれた昭和30年代。まだ貧しかったあの頃に現代人が郷愁を覚えるのは、誰もが「明日があるさ」と思えたからだろう。ひとは今日

「三丁目の夕日」に描かれた昭和30年代。まだ貧しかったあの頃に現代人が郷愁を覚えるのは、誰もが「明日があるさ」と思えたからだろう。ひとは今日

競争に勝てない人への心配りが最後に、そして最も大切な。その際のカギは「誰が弱者か」。

「高年齢者はみな弱者」「農家は一律に保護を」といった雑ばくな議論は社会を壊す。マイナンバー制導入などで「逆差別なき公平」を実現したい。

「高年齢者はみな弱者」「農家は一律に保護を」といった雑ばくな議論は社会を壊す。マイナンバー制導入などで「逆差別なき公平」を実現したい。

タインにも言っているように、イメージをすぐに具体化・言語化せず、イメージに遊び、その周囲にあるものをそぎ落とさず、熟する機会を待つことの大切さが語られました。これは、ビジネスなど芸術以外の世界にも通じる内容ではないでしょうか。

タインにも言っているように、イメージをすぐに具体化・言語化せず、イメージに遊び、その周囲にあるものをそぎ落とさず、熟する機会を待つことの大切さが語られました。これは、ビジネスなど芸術以外の世界にも通じる内容ではないでしょうか。

休息の後、第二部は昭和60年卒の蒲池恵子さんとスペシャル

ゲスト有村純親さんの協演でした。蒲池さんのピアノと響き合う、有村さんの繊細なサクソフォンの音色、秋の午後後に相応しい、豊潤かつ細やかな、彩りに満ちたハーモニイを楽しんでいただきました。アンコールはポール・マッカートニー「My Love」とも贅沢な音楽空間でした。ご参加いただいた方たちからは、大変満足したととても好評でした。来年も9月に開催予定です。ぜひお誘いあわせの上ご参加ください。

このサロンド修猷をもちまして私も昭和60年卒修猷馬会幹事学年としての行事が全て終了しました。執行部の方々、多くの館友の皆様のおかげで、無事

にやり遂げることができました。ありがとうございました。

「無闇に成長を求めず、成熟社会を楽しみ生き方を」という考え方もある。気持ちにはわかるが、実際には実現不可能だ。なぜなら海外勢に負ければ分配は維持できないからだ。グローバル化した世界では、常に他国との関係で物事が決まる。波を乗り越えるには競争と、その結果としての成長が不可欠だ。

「高年齢者はみな弱者」「農家は一律に保護を」といった雑ばくな議論は社会を壊す。マイナンバー制導入などで「逆差別なき公平」を実現したい。

「高年齢者はみな弱者」「農家は一律に保護を」といった雑ばくな議論は社会を壊す。マイナンバー制導入などで「逆差別なき公平」を実現したい。

「高年齢者はみな弱者」「農家は一律に保護を」といった雑ばくな議論は社会を壊す。マイナンバー制導入などで「逆差別なき公平」を実現したい。

「高年齢者はみな弱者」「農家は一律に保護を」といった雑ばくな議論は社会を壊す。マイナンバー制導入などで「逆差別なき公平」を実現したい。

「高年齢者はみな弱者」「農家は一律に保護を」といった雑ばくな議論は社会を壊す。マイナンバー制導入などで「逆差別なき公平」を実現したい。



早大卒後、日本経済新聞社に入社。取材記者として活躍後、チューリヒ支局長、ロンドンの欧州編集総局長を歴任。帰国後、日経金融新聞編集長、編集局金融部長、編集局局長、電波・電子戦略室長等を経て現職。

2012年10月21日(日)恒例の二木会ゴルフコンペが絶好の秋晴れの空の下、開催されました。

中川会長、土肥幹事長始め、初参加8名、女性5名を含む総勢31名が集結。場所は千葉県成田空港に近接する名門グリップサンドゴルフクラブで開催。本コースは松本陸彦様(代表取締役社長 昭和39年卒)のご厚意によ

優勝は古川英一さん(昭和57年卒)、準優勝は稲光孝さん(昭和39年卒)、3位は安川満俊(昭和61年卒)となりました。女子ベスグロはグロス107で初出場の川井文子さん(昭和61年卒)、男子ベスグロはグロス82で原忠さん(昭和56年卒)でした。更に、今回は第30回記念大会ということもあり、これまで全ての会に参加された伊藤洋子さん(昭和35年卒)に中川会長より記念品を贈呈いただきました。今回も多数の純爛豪華な賞品をご提供いただきました。中川会長、松本様、そして皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

次回大会は2013年4月21日(日)、大須賀副会長の御厚意により名門「富士小山ゴルフクラブ」での開催を予定しております。奮ってのご参加を宜しくお願い致します。

東京修猷会2013年度総会のご案内

テーマ:「無二(むに)の仲間~つなげよう修猷力」

6.14
今年は第2金曜日

2013年6月14日(金) 18:00よりホテルオークラ東京 別館地下2階アスコットホール

幹事学年:「無二(むに)の会(昭和62年卒)」

つながる館友、多種多様

卒業から長い年月を経ても、決して失われることのない、素晴らしい修猷の絆。そのさまざまなお姿をご紹介します。

其々の道を歩き、集まり、また其々の道を往くよかろう会 還暦同窓会と修学旅行

「よかろう会」 岩本 滋昌(昭和46年卒)



私たちがよかろう会は、昭和四十六年に修猷館高等学校を卒業しました。平成24年度に還暦を迎えた私は、2年程前から議論を重ねて来ました。実行委員会を立ち上げる前

に、同級生の間で色んな意見が飛び交いました。文集等何か形として残るものを作りたい等の様々な意見がありました。最終的に還暦同窓会と修学旅行を企画する事になりました。

しかし、段々名簿の抜けが目立ちましたので、修学旅行の案内が出来ただけ多くの同期に届く為に、まず平成23年に卒業40周年同窓会を開き、名簿の抜けを出来る限り少なくする事になりました。

お蔭様で、還暦同窓会には当日の無断出席も含め、101名の仲間がホテルオークラ福岡に集合してくれました。実行委員長の挨拶の後、名前がなかなか一致しないだろうと、首から名札を下げ各クラス毎に出席を取り、名前を呼ばれたらその場で手を挙げ返事をしして起立してもらいました。

お座敷での宴会では、前日と違い彼方此方で車座になり大きな笑声が聞こえるかと思えば、60年の人生を気持ち良く語り合う輪もあり、密な素晴らしい時間が流れました。同窓会に人数が少ないクラスもありですが、今度あまり参加していかない友も、これから定年を迎え時間に余裕が出来る友人を増やしてくると思われそうです。同じ修猷館を卒業した同期として連絡を絶やさないようにすることが大切だと感じています。今回の同期会の連絡により、連絡先不明の友の消息が判り出



(写真上) 修学旅行に先立って行われたホテルオークラ福岡での還暦同窓会。(写真中) 鹿児島への修学旅行は11月17日から1泊2日の日程で行われた。(写真下) 気分はすっかり高校生!? おおいに笑い、語らいました

伝統の梅野杯争奪ゴルフ大会(を目指して!?)

バスケット部OB 吉田 聡(昭和55年卒)



「東京の地でも修猷バスケット部OBチームを」との話が出たこともありましたが、現実には体育館の確保が難しく、それより何より「今さらバスケットはちょっとねえ」という声も多くて実現できず…。それならば、と4年前に企画したのが「梅野杯争奪修猷バスケット部OB・OGゴルフコンペ(略称「梅野杯」)です。「ゴルフでもやるか?」からだんだん話は発展して恩師である梅野哲雄先生をお招きし、大会名称も「梅野杯」と命名(カップも提供いただく!)。ゴ

ルフをやらない人でも先生や先輩・後輩との懇親ができる機会をと、「前夜祭」と称する飲み会も開催して飯永大会会長(昭和53年卒)のもと年1回のペースで継続しています。梅野先生が修猷館に赴任されたのが昭和51年。平成7年に異動されるまで、インターハイ等、全国大会の常連(?)として多くの「修猷魂」を育て上げてこられました。その後、市内の高校校長等を歴任され、現在は日本バスケットボール協会副会長を務めながら福大女子バスケット部の監督としても活躍中です。恩師のもとに集まり、懐かしい「梅野節」を聞きながら、昔話や最新のバスケット界の話を肴に、酒を酌み交わし、スポーツに汗を流して、修猷バスケットDNA(?)



前右列から2人目が梅野先生

メイリングリストで広がるOBの輪

ラグビー部OB 原 大基(昭和62年卒)



ラグビー部現役の支援、および関東在住OBの相互扶助、懇親が修猷館ラグビーOBクラブ関東支部の目的です。毎年70人以上が集まる年1回の新人歓迎会及びOB懇親会、春と秋に全国の公立高校のOBがグラウン

ドに集いラグビーを愉しむ「10校ラグビーフェスティバル」への参加、そして学生の就職活動を応援するガイダンスの実施など様々な活動を行っています。関東で連絡のとれるOBは150人程度。連絡手段は当初郵便のみでしたが5年ほど前からメイリングリスト(ML)を併用するようになりました。MLな一人の発言が他のOBにも瞬時に伝わるためコミュニケーションが活性化されています。OB



修猷ラグビー部フェイスブック

は幅広い世代の集まりですから、自分の知っている友人がいらないとなかなか参加しようとは思いません。MLで同世代の動向がわかることで気軽に参加してくれるOBも多くなったと感じています。最近話題のフェイスブックの利用も開始し、ますますOBの交流が活発になることを期待しています。

「安川修猷会のご紹介」

株式会社 安川電機 村田 晋 (昭和55年卒)



私が勤める安川電機の本社は北九州にあり、関東地区の1カ所を除いて、主要な工場や研究所も九州にあります。社内には「安川修猷会」があり、社内在籍のOBにもご参加いただき、時々懇親会を開いています。2009年からは当社特別顧問の中山眞さん(昭和33年卒)が「北九州修猷会」の会長を引き受けておられるので、2年に1回は「北九州修猷会」も開催しており、こちらも安川修猷会の皆さんはじめ、多くの卒業生に参加していただいています。



安川修猷会メンバーも多数参加した北九州修猷会

私が勤める安川電機の本社は北九州にあり、関東地区の1カ所を除いて、主要な工場や研究所も九州にあります。社内には「安川修猷会」があり、社内在籍のOBにもご参加いただき、時々懇親会を開いています。2009年からは当社特別顧問の中山眞さん(昭和33年卒)が「北九州修猷会」の会長を引き受けておられるので、2年に1回は「北九州修猷会」も開催しており、こちらも安川修猷会の皆さんはじめ、多くの卒業生に参加していただいています。

識したことはありませんでした。が、社内の年長の先輩からは「修猷在学中に第五郎さんに会う機会があり、その人柄に触れて安川電機志望を決めた」といった方や、社内の酒席での第五郎さんのことを懐かしく話される方もおられ、写真でしか見たことがない第五郎さんに一度お会いしてみたいと思ったものがあります。

現在、卒業生が九州地区だけでなく、社内にも高校の同窓はいないだろうと思っていたら、入社試験の面接官の部長さん、入社した後は工場長さんや、その下の課長さんも修猷卒、とたくさんの修猷卒業生がおられました。「北九州の会社なのになぜ？」と考えると、修猷館の同窓会長、また1964年の東京オリンピックの組織委員長を務め、母校に五輪の旗を寄贈した安川第五郎さんの会社、ということ、数ある企業の中でも当社を身近に感じられるようです。私も第五郎さんが当社長だったことを全く知らなかったわけではないのですが、正直、入社するまで意

夫婦として、館友として

伊藤 小百合 (昭和60年卒)



現在、東京で100名余りの外国人を雇う外国語会話スクールを夫婦で経営。結婚は大学卒業後すぐで、その後留学、会社経営、介護、そして子育てなど、普通とは違う順番に人生の局面を経験。その間、夫(伊藤盛明氏、昭和58年卒)とは多くの同じ風景を目にし、各場面で出会った素晴らしい友人達が私たちの宝物です。ですから、実は同窓

生同志という意識は、私たちの中では薄かったのが事実でした。そんな中、4年前、夫の学年が東京修猷会の幹事学年に。突然同窓会活動に熱がはいる夫の姿は、当初家族としては全く理解不可能。それでもその年に学年企画で始まったという託児の利用の要請をうけ、私自身が総会当日に3人の子供と足を運んだのが、久々の同窓会デビュー。3人の子供も父親たちの舞う「飛燕の舞」を見て、母校のカルチャーの一旦に触れたのです。

その後今度は、私自身が幹事学年に入りお手伝い、その1年後にはサロンド修猷の出演者と謝しています。

代々紡ぐ、館友の絆、家族の絆

この特集では、さまざまな館友の絆について、当事者の方々に寄稿いただいた。最後にぜひ紹介したいのが、館友の絆を代々紡ぎ続けているご家族だ。

昭和60年に、西日本新聞で連載された「修猷館二百年の青春」で、岡澤家の5代に渡る館友の絆が紹介された。初代の岡澤照行氏は藩校修猷館の出身。2代目の岡澤麟太郎氏(明治25年卒)は、県立修猷館の4期生。その後長く修猷館の「国漢」の教諭を務め、緒方竹虎氏、中野正剛氏は教え子にあたる。緒方竹虎氏逝去の年(昭和31年)に修猷館同窓会より刊行された冊子「緒方竹虎」には麟太郎氏からの追悼文も掲載され、氏は修猷館七十年史の編さんにも尽力されている。

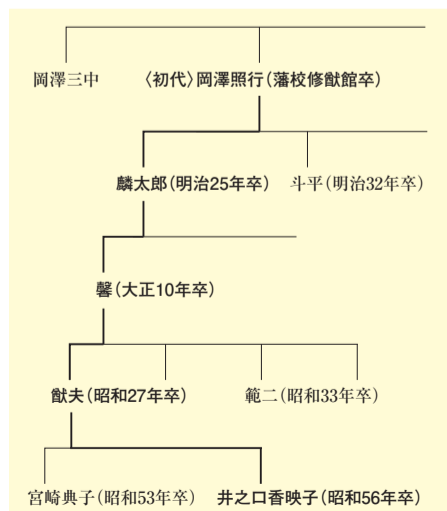


写真上・左/岡澤麟太郎氏。同・右/麟太郎氏は、「修猷七十年史」(昭和30年刊行)のほか、「修猷館物語」の筆者としても名を連ねている。また、「修猷山脈」(写真右)のなかで、麟太郎氏は、修猷館の名物教師として紹介されている。



「親族が集まると、必ず修猷の話になりやすい。あ・うんの呼吸で修猷の話ができる、というの、確かに心地いいですね。ただ、自分たちの学年が一番！とみんなが思っている中で、つい張り合ってしまうことも……。修猷と直接関わりのない家族は、そんな様子にあきれているかもしれません(笑)」。香映子さんの父、猷夫氏のお名前からも、岡澤家と「修猷」との縁を感じさせるが、名づけ親となったのは、祖父にあたる麟太郎氏だったのだそう。修猷を名に負う猷夫氏は、家族のなかでもとりわけ修猷愛が強く、最近には月に2、3回くらいのペースでプチ同窓会を開いているとか。親族たちとも、お互いの同窓生や、先輩・後輩たちと交流する機会もあり、世代を超えた館友ネットワークは今なお広がりに広がっているらしい。

「ただ、世代をつなぐというだけでなく、修猷を大事に思う気持ちをつないでいきたい」という香映子さん。修猷がいづまでも卒業生にとって誇れる学校であってほしい、というその願いには多くの人が共感するはずだ。



岡澤家の家系図。「我が家には麟太郎以前の資料が残っておらず、確実なのは麟太郎までと想っていたのですが、記事を書くにあたり、西日本新聞の記者の方が調べてくださったみたいです」(香映子さん)

ロンドンオリンピック・パラリンピック2012回想記 〜時代をつくれ!〜 ロンドン五輪を疾走する

ノンフィクション作家 松瀬 学(昭和54年卒)

2012年を振り返る上で欠かせないスポーツの祭典ロンドンオリンピック・パラリンピック。近代オリンピック30回目の節目となる今大会で日本は史上最多、38個のメダルを獲得。また、パラリンピックも、その発祥地での開催で話題を呼んだ。現地取材を行った松瀬学氏に回想記をご寄稿いただいた。

おとなのロンドン五輪

日本人はたぶん、オリンピックが好きだ。特に私は大好きだ。なぜだろう? 世界のトップアスリートが集い、4年に一度、世界一をめざす。もちろんハラハラドキドキの真剣勝負。舞台裏では国際政治、巨額マネーがうごめく。つまり、時代の「世界の構図」を垣間見ることができからである。

共同通信社時代の1988年ソウル大会からこのロンドン大会まで、すべて現場でフルカバリーしてきた。フリーとなった2000年アテネ大会からも、そのID(取材証)をゲットすることにこだわった。恐らくスポーツイベントで最も人手困難なIDを確保できるかどうかは、選手同様、「実力+運」だと思う。



オリンピック各会場(写真はすべて著者提供)

さて、ロンドンオリンピック。ひとりでいえば、「おとなの五輪」だった。移動手段の地下鉄はひんぱんにストップするし、車道の交通渋滞はひどかった。どこに行っても混雑だらけ。それでもカンフオクトアル(心地よく気楽)だった。警備費が670億円。軍隊を合わせると1万7千人の人員が警備に投入された。どんな厳しい警備になるかと心配していたら、なんとということはない。空港で「はい、どうぞ」と笑顔でいわれ、拍子抜けした。メリハリが効いているのだった。成熟都市ならではの、大会運営のボランティアも市民も柔軟性に富んでいた。北京大会と違い、自然な笑顔があふれていた。睡眠時間は平均3時間ほど。ビールを飲む暇もなかった。よせばいいのに、毎朝、6時頃から宿近くのハイドパークをランニングした。シャワーを浴びて、大会会場を飛び回る。黒馬のようなウサイン・ボルトの走りには度肝を抜かれた。8万人が埋めたスタンドからカメラのフラッシュがきらめく。まるでワンマンショー。静寂の中の電流の走りだった。

驚いたのは、レース後のミックスポーン(取材エリア)。スタジオの2階がテレビエリア、1階は記者エリアである。わたしは記者エリアに彼が来るまで1時間半もかかった。記者の館友のフィールドは地球。め

ざすはオリンピック運動の理念「国際平和の建設」である。オリンピックのあとはパラリンピック。さすがはパラリンピック発祥の地。英国の力を入れようはオリンピックのそれに匹敵するものだった。観客席はほとんど満杯。競技を見ながら、パラリンピックの父、ルートヴィヒ・グットマンが残した言葉を思い出した。「失われたものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ!」

オリンピック・パラリンピックはいいな。次はリオデジャネイロ。その次の2020年大会には東京が立候補している。16年五輪招致では、国内レースで福岡は東京に敗れた。だからこそ東京を応援しようではないか。

会場で館友を発見

柔道会場の空気はどんより暗かった。一方、水泳会場は活気があった。「北島康介さんを手ぶらで帰すわけにはいかない」と最終種目、男子メドレーリレーで日本は銀メダル。声援を送るスタンドの応援団を見渡せば、修猷館OBの金岡恒治くん(日本水泳連盟医事委員長)も声を張り上げていた。海外を回れば、ひょんなところで館友と出くわすことがある。館友のフィールドは地球。め

世界が舞台

〜躍進する館友たち〜



ラ共同年とソリン大会を取材している。時代を経て、2002年のフリージャーナリズムは1988年のソリン大会以降、すべての夏季大会を取材している。

「次」の世代を触発する「か」そう。館友よ、時代をつくらう。

主として人間型ロボットとその医療・福祉への応用に関する研究を行なっている。人間型の代表は2足歩行ロボットだが、メディアに流れるロボットは全て胴体から直に脚が出ており、膝を曲げつばなして歩かざるを得ない。しかしハビリティ系研究者の協力で骨盤運動により人間は膝を曲げずに進むことが分かり、骨盤を持つロボットを開発して膝が伸びる歩行を実現した。人間に近い歩行ができるのでEUの科学技術研究費(FP7)を得て欧

州の研究者たちと脳科学と歩行の視点で共同研究が始まった。電動車椅子は便利だが階段昇降はできないので2足ロボットの技術を応用し、宗像市にあるロボットベンチャー「テムザック」と協力して人間搭乗型の2足ロボットを開発した。アメリカで170人以上の搭乗実演をしたが安全に歩行した。他に咀嚼、発話、フルートやサクソフォン演奏をするロボットも開発してきたが、近年は心理面を含んだ研

究に広がっている。その代表は顔と全身で情動を表出する2足ロボットで、心理学者と共同研究を進めている。これら人間型ロボットの応用研究として医療へ展開している。特に九大医学部教授で修猷館の先輩でもある橋爪誠先生とは、大腸内視鏡ロボット、数値評価が可能なる内視鏡手術の訓練装置などの共同研究をさせていた。他に東京女子医大と一緒に超音波断層診断ロボット(消化器内科)や気管挿管訓練用の人間型ロボット(麻酔科)や歩行リハビリ用の超小型運動計測装置(リハビリ科)、また昭和歯学部とは古くから歯科治療訓練用の患者口



歯科用患者ロボット「デンタロイド」



人間型ロボットの研究

早稲田大学 創造理工学部 総合機械工学科 教授 高西 淳夫(昭和50年卒)

「I can make it there.」

「I'll make it anywhere.」

「It's up to you.」

「It's up to you」の街で成功すれば、世界中どこでも成功できる。それは自分次第。誰し自分の人生を謳歌したい。しかし、それもこれも「It's up to you」自分次第なのだ。毎年7月に現役修猷生を受け入れる米国修猷同窓会で私も微力ながらお手伝いをさせていた。だいたい。好奇心に溢れたあの目には大人として嬉しい思いを抱く。彼等が先輩達に必ず訊ねる質問「どうしたら自分のやりたいことがやれますか?」。先輩達の答は不思議にも共通している。それは「自分次第」。私は現役生がNY滞在中に行

うセミナーで分子生物学とStem Cells(幹細胞)を用いた「Life Science」の話をしてい。その中で「Life Science」の発展に貢献しているマウスを紹介する。DNAの一塩基を交換するだけで黒色から真っ白になったマウスやクラゲから発見された遺伝子を用いて緑の蛍光色に光らせたマウスなど自然界には存在しないマウスである。Scienceには無から有を創る、「創造する力」があることを伝えている。地球温暖化、食料・エネルギー不足、疾病など地球規模の問題が起きている。人類が局面しているこれらの問題にも「創造する力」で應ずること

なく次の五年、十年、百年を見据えて果敢に挑むサムライ、なしに修猷生から出てきて欲しい。日本人、世界人を奮い起たせてほしい。そして、これもこれも「It's up to you」なのだ。

「It's up to you」の街で成功すれば、世界中どこでも成功できる。それは自分次第。誰し自分の人生を謳歌したい。しかし、それもこれも「It's up to you」自分次第なのだ。毎年7月に現役修猷生を受け入れる米国修猷同窓会で私も微力ながらお手伝いをさせていた。だいたい。好奇心に溢れたあの目には大人として嬉しい思いを抱く。彼等が先輩達に必ず訊ねる質問「どうしたら自分のやりたいことがやれますか?」。先輩達の答は不思議にも共通している。それは「自分次第」。私は現役生がNY滞在中に行

うセミナーで分子生物学とStem Cells(幹細胞)を用いた「Life Science」の話をしてい。その中で「Life Science」の発展に貢献しているマウスを紹介する。DNAの一塩基を交換するだけで黒色から真っ白になったマウスやクラゲから発見された遺伝子を用いて緑の蛍光色に光らせたマウスなど自然界には存在しないマウスである。Scienceには無から有を創る、「創造する力」があることを伝えている。地球温暖化、食料・エネルギー不足、疾病など地球規模の問題が起きている。人類が局面しているこれらの問題にも「創造する力」で應ずること

なく次の五年、十年、百年を見据えて果敢に挑むサムライ、なしに修猷生から出てきて欲しい。日本人、世界人を奮い起たせてほしい。そして、これもこれも「It's up to you」なのだ。

なく次の五年、十年、百年を見据えて果敢に挑むサムライ、なしに修猷生から出てきて欲しい。日本人、世界人を奮い起たせてほしい。そして、これもこれも「It's up to you」なのだ。



It's up to you

Memorial Sloan-Kettering Cancer Center Senior Research Scientist 木村 友喜(昭和61年卒)

「I'll make it anywhere.」

「It's up to you.」

なく次の五年、十年、百年を見据えて果敢に挑むサムライ、なしに修猷生から出てきて欲しい。日本人、世界人を奮い起たせてほしい。そして、これもこれも「It's up to you」なのだ。

NY研修でScienceの可能性を学生に講演する著者

1年生がステップアップ研修 社会貢献の企画を競う

1年生は、昨年8月1日から、大分県九重町で夏休み恒例の学校行事「ステップアップ研修」に参加した。2泊3日の日程で、注目されるのが「世のため人のため」企画コンテスト。クラス



歌を作る企画を発表した優勝クラスの生徒ら

目的は？
—— 研修の目的は、社会貢献策を考え、発表するということだ。「皇国の為に世のために、尽くす館友幾多。館歌を地で行くよなこの企画に、参加した学年主任教諭と生徒に話を聞いた。

—— 研修の目的は？
—— 目的は、社会貢献策を考え、発表するということだ。「皇国の為に世のために、尽くす館友幾多。館歌を地で行くよなこの企画に、参加した学年主任教諭と生徒に話を聞いた。

—— 研修の目的は？
—— 目的は、社会貢献策を考え、発表するということだ。「皇国の為に世のために、尽くす館友幾多。館歌を地で行くよなこの企画に、参加した学年主任教諭と生徒に話を聞いた。



売店の冷蔵ケース・「カツ飯」・「オニカラ」

校舎が建て替わり、すっかり綺麗になった学食。売店はデザート類も豊富で、ほとんどコンビニのような品揃えだ。そんな中、今の修猷生たちのランチ事情はどうなっているのだろうか？

修猷生ランチ事情

昨年7月に、修猷館PTAが実施したアンケートによると、「おもに昼食は？」という設問に「弁当」という回答が、なんと9割を超えている。「学食」は5%、「売店で購入」は3%と、かなりの少数派。

—— 弁当という回答が、なんと9割を超えている。「学食」は5%、「売店で購入」は3%と、かなりの少数派。

5%というわけではない。アンケートでは学食の味についても尋ねているが、美味しくないと答えたのは僅かに1割。学食メニューで最も人気があるのは、「一見おしゃれなカフェ風の「カツ飯」400円。売店での人気商品は「オニカラ」で、これはオニギリと唐揚げ2個のセットで180円。約50セットがあつという間に売り切れてしまったため、朝補習が終わるや売店に走るそうだ。

—— 売店での人気商品は「オニカラ」で、これはオニギリと唐揚げ2個のセットで180円。約50セットがあつという間に売り切れてしまったため、朝補習が終わるや売店に走るそうだ。

最近では、OBの講話や久住登山がありました。「世のため人のため」企画コンテストは、どんなことをしたのですか。

—— 各クラスで1案ずつ、自らができる社会貢献策を発表しました。放置自転車を使い自転車発電機を作る案や、英語に触れる時間を増やし、国際貢献できる人材を育てる案など計10案が揃いました。

—— いきなり「世のため人のため」と聞いて、生徒に戸惑いはなかったですか。

—— 岡村さん 先生たちには、普段から「人のためになる人間になれる」と言われています。館歌にも「皇国の為に世のために」という一節がありますから、違和感はありません。

—— 優勝した「元氣by日本」とはどんな企画ですか。

—— 岡村さん 先生たちには、普段から「人のためになる人間になれる」と言われています。館歌にも「皇国の為に世のために」という一節がありますから、違和感はありません。

「現役修猷生最新事情」

活躍！
ディベート部

ディベート部は、平成十三年創部。東京で開催される全国中学生・高校ディベート選手権(通称ディベート甲子園)に、同好会時代から十四年連続で出場している。昨年は「日本は死刑制度を廃止すべきか」を論題に討論し、ベスト16という成績を取めた。東京の大学に通う卒業生も指導と応援に駆けつけた。

—— 資料を収集し論術を考え、実践形式での練習や戦略会議を重ねて大会に臨む。「ディベートを

「その先に」

第65回修猷大運動会 黄ブロック応コン長 佐藤 大介

この夏、黄ブロック応コン長としてたくさんの言葉と向き合ってきた。どんな言葉を歌詞に込めるか、パネル文字は何を出すか、そして人の前を何を託す。自分たちの心、想いを、ひと夏のすべてをブロック生に託す。

—— 運動会期間中、常々自分に言い聞かせてきた事は「負ければ自分のせい、勝てばみんなのおかげ」応コンにおいて315人という集団の先頭を引っ張る。自分の姿で魅せ、言葉で惹きつける。誰一人として応コンをつまらぬと思わないように、全員全力の応コンを成し遂げる。そのための言葉。それはとても悩

「ステップアップ」

研修とは

昭和50年代以降、新入生を対象に4月下旬、大分県九重町で行われていた「規律と友情の体験学習」が、平成20年度より実施時期を8月に移し、「ステップアップ研修」と名称を変え、九重町で実施されている。

—— 「伝統」の久住登山に加え、生徒が自らの生き方や、社会

のあり方などを考える研修プログラムが充実。生徒による研修実行委員会を中心に、研修を企画運営し、以前にも増して、生徒の自主性育成に力点を置いていることが特徴の一つとなっている。

—— 昨年の研修では、同窓会長でもある西日本シティ銀行久保田勇夫頭取が、「日・英・米の大学と社会(どう違うか、何を学ぶか)」と題して講演。英語力を身につけ、国際社会の中で、日本の立場を自ら判断する重要性を訴えた。このほか、OB大学生が、大学の合格体験や学生生活を披露。宗弘昭教諭をコーディネーターに、価値観について生徒が議論する「白熱教室in久住」も行われた。

315人でつないだ美しい虹

着任のご挨拶 不思議な修猷の魅力こそ、教育の王道

第三十代館長 奥山 訓近



重さを真摯に受け止めて、修猷館の更なる躍進のために全身全霊で力を尽くす決意です。よろしくお願ひいたします。

昨年六月の東京修猷会総会・懇親会では大変お世話になりました。母校から遠く離れた東京の地で六百名を超える友人の方々が、世を越え「修猷」で盛り上がり、それを存分に楽しんでる様子に圧倒されました。当番幹事学年(六一会)の結束や創意工夫を凝らしたプログラムと演出はとて素晴らしい。ネットワークの広さや繋がり、母校・先輩を想う温かさに驚きと畏敬の念を抱かざるを得ませんでした。僅か

三年間の高校生活で何が培われ、どう育まれたのか？修猷には、目に見える伝統も数多くありますが、校内に漬かつてみて初めて解る連綿と大切に受け継がれてきた修猷固有の精神と学校文化があります。基本は質朴剛健にして自由闊達、生徒による自治が今も大切にされており、修猷生としての誇りや自覚を生徒が生徒に促している。更に、先輩方から「世のため、人のため」という使命感や修猷人としての生き方・在り方が折に触れて擦り込まれていく。そこに、修猷の価値があり、最大の魅力だと感じています。

本校の歴史と伝統、輝かしい実績を思うとき、身の引き締まる思いがしますが、その職責の

や運動会などの学校行事にも大いに熱中します。文と武を分業する多くの私立高校と異なり、一人で二兎も三兎も追い続けることは容易ではありませんが、こうした高校生生活をおして、修猷生は、知的創造力を高め、チャレンジ精神や試練に遭遇しても怯まない強さ、失敗から学ぶ力、挫折から立ち直る力を育み、思いやりの心、感謝の心を身に付けていく。換言すれば、人としての「強さ」「優しさ」「賢さ」を育み、周りを「明るく」「温かく」「元氣」にする力が育っているのだと思います。個性豊かで特異な才能を持つ多くの仲間と切磋琢磨し青春を謳歌することで、自分を大きく成長させ、そして修猷で得た館友の存在は生涯にわたって貴重な宝物になっていると。

本年が皆様にとって幸の多い、より良い年となりますように心から祈念いたします。

2012年度寄付金

2011年11月1日から2012年10月31日までに多数の皆様からご寄付いただきました。ありがとうございます。お礼の意味を込めてお名前を掲載させていただきます。(敬称略・卒年別)
また、年会費の納入をまだ済まされていない方は、振替用紙にて郵便局やコンビニからご送金くださるようお願い申し上げます。詳細は同封の案内書をご覧ください。

00170-6-172892 東京修猷会事務局

- 奥山訓近(館長)、(昭9)富田明德、(昭11)橋本胖、(昭12)宮川一二、(昭15)明石隆次、(昭17)安藤雄三、林健児、(昭18)不破敬一郎、(昭19)増田太志、田尻重彦、毛利昂志、(昭20)野上三男、ジャーニ岩橋、尾島成美、(昭21)筑摩貫一、神田孝道、(昭22)伊藤輝夫、小池啓雄、増崎昭夫、濱田理、高嶋一衛、(昭23)井上洋一、吉田良一、荒谷俊治、助川義直、大西勇、中村邦也、田尻利重、白木彬雄、(昭24)安藏復也、(昭25)山本義治、(昭26)吉田周弘、小西正利、松山幹、常岡宏、太田進、大平修、中村道生、藤吉敏生、波多野聖雄、廣瀬貞雄、洲上貫之、(昭27)金田久仁彦、清原慶三、徳山悟郎、和栗真次郎、(昭28)日戸力、梅本章夫、柳島富男、(昭29)高木道子、村越登、(昭30)久保久、原田雅弘、星野節子、堤正、平木英人、(昭31)安藤徹、伊達直哉、溝部信介、城戸弘、村山博之、村田和夫、中村保夫、箱島信一、(昭32)井上智晴、鳥居健太、内藤武宣、平野熙幸、林克己、和田津生、(昭33)河野美和子、河野理、香崎温子、佐竹儀治、寺澤美和子、小野勲、大西正俊、武石忠彦、米倉實、(昭34)加藤泰、岩田龍一郎、行武賢一、讚井邦夫、川辺猷治、田中義人、(昭35)伊藤洋子、羽立教江、可見晋、江川清、今村宏明、三嶋睦夫、安藤誠四郎、横倉稔明、鬼木博文、倉成洋三、中島成之、土井高夫、浜地康彦、(昭37)古賀肇、大須賀頼彦、長谷川誠一、茂地計、(昭38)上田茂、渡辺紀大、(昭39)井上忠一、貝島資邦、久保田康史、高橋登世子、四郎九聡、松本陸彦、清田瞭、(昭40)井上浩、山形紀明、森秀則、泉和雄、棚町精子、由良範泰、(昭41)安田修之助、恒松芳一、高尾義行、新井真理子、森田澄夫、平岡珠樹、有山賢良、(昭42)井上友二、溝上雅史、(昭43)伊豆安生、宮地徳文、(昭44)横田勝介、(昭45)本田由紀子、(昭46)宮原大彦、栗山英俊、鹿児島正信、土肥研一、(昭47)池田誠一郎、塚本幸一、(昭48)津崎兼彰、(昭49)阿河勝久、井手富士雄、橋村秀喜、古森光一郎、本庄英智、(昭50)乙藤光男、古賀隆太郎、田中雅美、野中哲昌、(昭51)油田哲、(昭52)古賀敏文、寺岡隆宏、(昭53)村田隆信、(昭54)中原誠也、(昭56)佐田誠、田中昭人、(昭57)外園かおり、(昭58)安部眞一、井手慶祐、(昭59)白壁勝榮、服部豊、(昭61)福島和美、(昭62)田尻公一、(平2)福永かおる、(平8)口石準、(昭和43)学年、(昭和44)学年、(昭和54)学年

昭和39年卒 学年便り

昭和39年に母校を卒業した我々は早や66・67歳となり第二、第三の人生を楽しんでおりますが、来年卒業50周年を迎えます。ほかの年次の皆さん方と同様、東京修猷会幹事を担った20数年前頃から同期全体で集まる様になり近年は新年に定例会を開催しております。参加者は福岡等からも含め40名前後となっており、昨年は高校卒業以来音信のなかった某君が皆の前に姿を現し一気に盛り上がりました。

最近「高校よせがきノート」で話題の「新橋有薫酒蔵」を基に集まるものが多くなっています。現役生たちが昨年の東日本大震災を機に研修旅行で仙台一高生との交流を進めていくとのことですが縁あって我々も同窓生との交流を超えて仙台一高の同期生との有志による交流会をはじめ

この秋には卒業50周年記念修学旅行(京都一泊二日)を福岡、東京、近畿昭39会合同で開催することとして現在楽しい企画を検討しているところとです。同期の清田瞭君が副会長となつて東京修猷会の活動にももっと積極的に参加していかうと思っております。

昭和39年卒 常任幹事 松本 睦彦

昭39会では「元氣！元氣！」を合言葉に50数年前、福岡・百道原に集ったあの頃を懐かしみ何故か毎年同じ話題で盛り上がりつつあり「修猷」の絆を深めていきます。ゴルフ会はずに26回を積み重ね、焼き鳥を食べる会、



「東京昭39会 第26回ゴルフ会」2012.11.13開催

2012年 二木会

- 第580回 H24.1 和才博美氏(昭和40年卒)
NTTコミュニケーションズ(株)取締役相談役
『情報通信でつながる世界、そして“つながる未来へ”』
- 第581回 H24.2 高見信三氏(昭和51年卒)
(株)日本経済新聞社電波・電子戦略室室長
『2012年の日本経済・金融市場動向を展望する』
- 第582回 H24.3 中川原章氏(昭和41年卒)
千葉県がんセンター センター長
『放射能汚染と子ども：「フクシマ症候群」への対策は万全か?』
- 第583回 H24.4 福山正文氏(昭和35年卒)
臨済宗大徳寺派 海晏山・興徳寺住職
『禅とは？より良く生きるとは?』
- 第584回 H24.5 田中素香氏(昭和38年卒)
日本国際経済学会顧問、日本E U学会理事
『欧州危機の現状と展望』
- 第585回 H24.7 加藤泰彦氏(昭和38年入学)
三井造船(株)代表取締役社長
『日本の重工業産業の新たな挑戦』
- 第586回 H24.9 第6回Salon de 修猷
『名なしの森の中で—魅惑の芸術の世界をあなたに—』
- 第587回 H24.10 堤尚広氏(昭和55年卒)
防衛省地方協力局提供施設課長
『日本のODA(政府開発援助)の果たす役割』
- 第588回 H24.11 大塚久哲氏(昭和42年卒)
九州大学大学院工学研究院社会基盤部門教授
『東日本大震災を経験して考えること』
- H24.12 忘年会

東京修猷会 URL <http://www.shuyu.gr.jp>

執行部紹介



服部新副幹事長(昭和59年卒)

この度東京修猷会執行部で、二木会を担当させていただくことになりました。長い歴史の中で育まれてきた素晴らしい伝統を大切にしつつ、幹事学年の皆さんのフレッシュなアイデアも取り入れながら運営していきたいと思っております。より多くの幅広い年次の皆さんと、二木会でお目にかかれることを楽しみにしております。
ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

やつとの思いで発行にたどり着きました。今号のコンセプトは「GO AHEAD! 修猷!」未来へと続く館友の絆。時を経て、たとえ遠く離れていても、決して途切れることのない素晴らしい絆を表現したい!その一心で取り組みました。玉稿や写真が集まる程に、月日を重ねながらも育まれる愛校心が活字となって紙上で躍る。稀有にして幸せな経験を一同賜った次第です。だからこそ会報を読んだ後、ふと館友に連絡してみたいくなる、そんな新年のアクションに繋がれば幸いです。
末筆ではございますが編集に御協力下さいました皆様へ、心から御礼申し上げます。
昭和61年卒
会報編集担当一同